

# 宇都宮大学共同教育学部における 令和3年度教員相互授業参観の実施報告

福田 奏子・夏目ゆうの・小野瀬善行・南 伸昌

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日



# 宇都宮大学共同教育学部における 令和3年度教員相互授業参観の実施報告<sup>†</sup>

福田 奏子\*・夏目ゆうの\*・小野瀬善行\*\*・南 伸昌\*

宇都宮大学共同教育学部\*

宇都宮大学大学院教育実践高度化専攻\*\*

FD「教員相互授業参観」の活性化及び質の向上を図るために、宇都宮大学共同教育学部において、令和3年度にモデル授業参観を導入した。授業検討会参加者が増加し、参観者の学びだけでなく、授業改善へ繋がる「ファカルティ連携型」の授業参観とすることができた。コロナ禍の状況への配慮も含め、授業参観には対面、リアルタイムでのZoom参観、オンデマンドのビデオ視聴の3つの方法を設定し、オンラインでの授業検討会も実施した。参観報告書の記述から、オンラインであっても、映像配信を工夫することにより、対面と遜色ない授業参観とできたことが分かった。その他、実践から得られた効果と課題について報告する。

キーワード：FD，教員相互授業参観，モデル授業，オンライン参観

## 1. 本学部における教員相互授業参観の推移

教員相互授業参観は、平成20年度の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を受け、<sup>1)</sup> 本学では平成21年度から、FDの一部として実施の方針が打ち出された。本学部において、当初は個人で授業者に参観を申し込み、参観後に自由記述の報告書を授業者及び教務委員会に提出し、学習会でその学びを共有する、所謂「啓蒙型」の授業参観であった。

平成30年度は、実施方法はそのまま評価の仕組みを見直し、自由記述に加え、参観者にとって参考となった観点として「準備」「表現」「内容」「学生の参加を促す仕組み」「評価・支援」5つのキーワ

ードを設定し、その選択状況を調べた。その結果、授業における「表現」、「内容」、「学生の参加を促す仕組み」についての評価が高く、また、自分野の授業よりも他分野の授業参観の方が、参観者の意識を高める効果があることが分かった。

令和元年度は、学部教員を分野の異なる4名程度のグループに分け、その中で相互に授業参観を行い、授業検討会の実施を推奨した。<sup>2)</sup> これにより、専門外の授業を参観すると共に、授業改善に繋げる「ファカルティ連携型」授業参観<sup>3)</sup>の実現を試みた。また、参観者の学びを評価するために、①教材・教具、②教授行為、③学習活動、④授業内容の専門性、課題性、⑤その他の5観点を設定し、各観点到「教科書、配布資料」、「グループでの話し合い」などのキーワードを各3-4個設定し、それらの選択率により数値化した。その結果、参観者はICT活用や学生と授業担当者との関係づくりを含めた、学生が能動的に授業に取り組む工夫についての学びを深められたことが分かった。一方、グループ参観・授業検討会は2件に留まり、時間調整の難しさが課題として残った。

令和2年度は、コロナ禍による教員相互授業参観の実施は見送った。ただ、アフターコロナの授業形態の変化も見越し、翌年度以降の対応を考えるため

<sup>†</sup> Kanako FUKUDA\*, Yuuno NATSUME\*, Yoshiyuki ONOSE\*\* and Nobumasa MINAMI\*: Report of Mutual Class Observations among Teachers, carried out in the 3rd year of Reiwa

Keywords: FD, Mutual class observations, Assessment

\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

\*\* Division of Professional Teacher Education, Graduate School of Utsunomiya University (連絡先: minami@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

に、オンライン授業における教員相互授業参観の活用方法について学部教員にアンケート調査を行い、FDとして期待できる効果についての考え方を集約した。

## 2. 令和3年度の教員相互授業参観

令和3年度は、前期後期共に授業参観期間を設け、通常の個別授業参観と自主グループによる授業参観を設定した。更に、過去の実践の反省に立ち、グループによる授業参観・授業検討会の実質化を図り、前期に「モデル授業」2つと「参考授業」2つを設定した。モデル授業は、宇都宮大学ベストレクチャー賞を受賞した科目から「①初等国語指導法」、「②初等理科指導法」を選定し、参考授業は正副教務委員長が、それぞれ「③基礎の化学」、「④教育の社会的背景と制度原理」を提供することとした。

①-④の授業参観は、対面、オンタイムのオンライン（Zoom配信）、オンデマンドのオンライン（授業動画の視聴）を組み合わせて実施した。授業検討会は全てオンタイムのオンラインで実施した。参観者にはGoogleフォーム上の報告書の記入を求め、授業検討会ごとにグループ参観報告の記入を求めた。

①-④の参観方法と参観者数、授業検討会参加者数を表1に示す。なお、対面/オンタイム参観者には動画配信担当者を、検討会参加者には授業者を含む。

表1. 参観方法と参観者数、授業検討会参加者数

授業	参観方法、参観者数	検討会
①	オンタイム13名、オンデマンド8名	11名
②	対面5名、オンタイム5名	10名
③	オンタイム10名	10名
④	対面7名、オンタイム2名	6名

延べの授業参観者は、対面、オンラインを合わせて50名、授業検討会参加者は37名であった。

個別授業参観の参観者数は前期後期で4授業4名、自主グループによる授業参観は1授業3名（授業検討会4名）であった。表1の結果と合わせると、今年度の延べの参観者数は57名、被参観授業は9つ、授業検討会参加者数は41名となった。この内、一人で2回参観した教員は6名、3回参観、4回参観とも2名おり、重複を省くと今年度の教員相互授業参観に参加した教員は41名となる。

令和元年度の教員相互授業参観への参加実績は、

観察授業数43、グループでの参観・授業検討会2件、延べ参観者53名、参加教員数33であった。モデル授業等の設定により授業検討会を拡充し、参観者数を増やすことができたが、被参観授業数は大幅に減る結果となった。

## 3. 授業参観の効果

### 3-1. キーワードから見た学びの傾向

報告書では、以下のa～e各項目において、枠内に記した観点を設定し、参考になったものを選んでもらった。観点の右側の数字は、その選択率（%）を示す。

#### a. 教材・教具

教科書、配布資料、ワークシート：63  
実物、映像、モデル教材：20  
板書、スライド、ICT等の活用：69

#### b. 教授行為

説明・解説、指示、模範・演示：57  
発問、問いかけ：53  
机間指導、個別支援：12  
導入、展開、まとめの工夫：51

#### c. 学習活動

ペア・グループ等での話し合い：49  
課題解決的な学習、実験、実習：33  
学生による発表・プレゼン：18

#### d. 授業内容の専門性、課題性

先哲の思想や考え方、科学的な理論や根拠等の活用：27  
学校・地域等の現場の課題に基づく内容：41  
学術的知見の紹介や活用：20

#### e. 学習の評価や環境

学習の評価・ふり返り：51  
授業前・授業後の課題：57  
学習環境：16

「a. 教材・教具」、「b. 教授行為」、「e. 学習の評価」についての観点の選択率が高く、「d. 授業内容の専門性」は低めであった。分野を異にする教員の授業を参観しており、教授内容の専門性よりも教え方自体への興味関心が高いことが分かる。「c. 学習活動」の数値が低いのは、コロナ禍による学習活動の制約を反映している可能性もある。

### 3-2. 自由記述から見た学びの傾向

a～e各項目について、どのように参考になった

のか、具体的に記述してもらった。また、授業を参観しての感想や、教員相互授業参観の運営に関してのご意見等を具体的に記述してもらった。記述内容の抜粋を、項目ごとに以下の枠内に記す。

#### a. 教材・教具

スライドの見やすさ、適切な分量／オンラインツールを活用した学生とのコミュニケーション、フィードバック／学生評価に基づく課題の設定、学生の回答や意見の教材への活用／学生の振り返りを促す、ワークシートやスライドの工夫／学生目線に立った教材の作成／興味関心を引き立てる題材の選定／授業の見通しをもたせる工夫

#### b. 教授行為

授業時間内だけでなく、予習・復習も含めた授業設計／問いかけを多くし、緊張感を持った受講環境構築／ゆとりをもったブレイクアウトセッションの設定／振り返り、本題、まとめなど、学生の集中力が途切れないよう授業を区切る工夫／指示や説明が、簡潔・的確かつ、十分な情報を含んでおり、学生が理解しやすい長さである点／教員の説明だけでなく、学生の回答を教室全体で広く共有しつつ展開している点／発表（学生の発言）に対するフィードバックが丁寧かつ論点をまとめていく形／充実したガイダンスと活動を行う時間の担保／説得力のあるコメント

#### c. 学習活動

ブレイクアウトルームを活用した小人数でのディスカッション／授業前学習の充実／学習の振り返りの十分な時間確保／学生の発表内容への具体的な称賛／演習をしてからの講義という組み立て／理科実験の体験等のアクティブラーニング／適切なタイミングでの助言による思考の深め方

#### d. 授業内容の専門性、課題性

身近なテーマについての学術的観点からの解説／図表等を活用した専門的内容の簡潔・明快な説明／授業を受講する上での課題意識の持たせ方／教育対象である小学生の実態把握についての意識づけ／受講者のニーズに沿った学習内容の精選／専門分野外の教員も明確に理解できる授業の意義の伝え方

#### e. 学習の評価や環境

課題への丁寧な添削と信頼関係構築／自己評価の設定による学習の振り返りの促進／全体の理解度集計の公開による自他比較／評価スタンプを活用した学生の評価への意識向上／学生同士の評価共有による学習意欲向上／3密にならないよう工夫されたグループ活動の準備・実施／タブレット端末を活用したワークシート共有

授業を参観しての感想やご意見等

コロナ禍でのオンライン参観・授業検討会への参加のしやすさ／オンデマンド授業公開による参観時間の自由度の高さ／複数台のカメラを活用したオンライン配信への高評価／モデル授業・参考授業設定による参加のしやすさ／他分野の授業参観の機会確保に対する高評価／フォーム形式での参観報告の方法に対する高評価

各項目について、多くの自由記述が得られた。「a. 教材・教具」については、学生が分かりやすく興味をもちやすいスライドやワークシート等の工夫、体験活動や話し合い活動を多く含む授業での見通しをもたせる工夫について、記述が多く見られた。普段、他の教員の教材等を見る機会は少ないことから、参観者への教材の共有および学生のワークシートへの記述の様子等を共有できたことは、参観者にとって参考となる点が多くあったと考える。

「b. 教授行為」については、90分の講義の組み立て方の工夫や、緊張感をもたせ集中力を持続させるための雰囲気作り、学生の発表への効果的なフィードバック等についての記述が多く見られた。本項目では、他の項目に比して、最も多岐にわたる内容について記述が得られたことから、参観者にとって非常に関心が高く、授業参観を通して多くの気付きが得られたと考える。

「c. 学習活動」については、コロナ禍でのディスカッション実施の工夫や、演習と講義の組み立てについての記述が多く見られた。参観者からは、コロナ禍でのオンラインのディスカッション実施や、演習課題の設定に悩みを感じている回答も得られた。このことから、今年度の授業参観の取り組みにおいて、対面授業だけでなく、オンラインのみの授業も配信したことは、参観者にとって有用であったと考える。

「d. 授業内容の専門性」については、専門的な知識の理解定着を図るために、身近なテーマを取り上げることや授業を受講する課題意識を十分にもたせるという記述が多く見られた。この点については、専門的な知識に関する講義を、学生にいかに意欲的に受講してもらうかという点について、悩みを感じている記述も複数見られたことから、授業参観を通して解決の糸口を得られた参観者もいることが考えられる。

「e. 学習の評価」については、課題への丁寧な添削を通じて授業担当者と学生との信頼関係の構築がなされるとともに、学生同士の評価の共有を通して学生の意欲向上も図ることができるという意見が多く見られた。

この点については、授業実施後の授業検討会において、添削の時間確保や、学生との信頼関係の構築のために重視している点について質疑応答が活発になされたことから参観者の関心が高かったことが分かる。

授業参観への意見については、オンラインを活用して授業参観および授業検討会を実施することで、コロナ禍や時間的な制約がある中でも参加がしやすいという意見が多く見られた。参観授業のオンライン配信にあたっては、カメラを複数台活用し、授業者、板書およびスライド、学生の様子、学生の手元およびワークシートの映像を提示できるよう工夫したこともこのような評価につながったと考える。他分野の授業を参観する機会が少なく貴重な機会であったという意見も複数見られたことから、今後もオンラインでの授業配信も活用しながら、授業参観を継続していくことは有用であると考えている。

#### 4. まとめと展望

以下、今年度の取り組みにおいて主要な観点である「グループによる授業参観・授業検討会の実質化」について、授業提供者の一人として事例を述べていきたい。

筆者（小野瀬）は「参考授業」の「④教育の社会的背景と制度原理」の講義を担当した。本授業は群馬大学と宇都宮大学の学生がオンラインで共に学ぶ斉一科目であり2年生の選択必修科目である。対面プラスオンライン（当日はオンタイム）という形態の講義であり、教材や双方の学生への関わり方が適切かどうかについて学期を通じて試行錯誤していた。上述のように筆者自身も「教授内容の専門性よりも教え方自体への興味関心が高い」状況にあり、その点について参観者から様々な意見が寄せられたことは自らの講義を省察するよい機会となった。授業提供者としても自由記述「b. 教授行為」のまとめにある諸観点について強く感じることができた。

また、講義後に実施した授業検討会では、多くの参観者に授業参観と授業検討会の双方に参加をいただき、議論を深めることができた。紙幅の関係で詳細は述べられないが、講義を通じて教員養成課程を構成する一科目として学生にどのような資質・能力を身につけさせたいのかについて意見交換を行うことができたことが筆者としては大変有り難かった。

以上の点から令和3年度の取り組みの目標であった「実質化」は相当程度達成することができたと考えている。無論、一事例であるため一般化、

客観化は困難である。今後は、授業提供者・参観者に対する聞き取り調査などを行う質的研究を行う必要性も示唆される。

他方で、その議論の過程で、教員養成の学部としてどのような能力育成を学生に保障していくのかについて検討の余地があるということも改めて感じた。「学位プログラムで育成する能力の明確化」により「個々の教員は、各授業科目の総学修時間において学生がどのような学びを主体的に行うことが必要かを他の授業科目を担当する教員と連携しながら設計できる」のであり、「個々の教員が自分に求められている役割を理解し全学の方針にそって十分な指導をしているのが重要」であるとされている<sup>4)</sup>。しかしながら、多忙もあり、学生にどのような学びを保障するのか、どのような教師を養成するのかについて教員間の意見交換は十分ではない。今後は、授業参観・授業検討会をこのような意見交換の場として捉まえていくことがより重要となろう。またその際の指標としてすでに運用が始まっている共同教育学部の「ルーブリック」の組織的な利活用が必要となってくることを一授業者、一構成員として実感することができた。換言すれば、全学的な方針、全学部的な方針と自らの講義や演習を結び付け、必要に応じて修正を繰り返すという組織学習が求められていることを一授業者として実感することができた。そのような組織学習に授業参観・授業検討会を位置づけるということが今後の展望であり、そのための具体的な方法について仮説を生成し、検証していくことが課題ということが出来る。

#### 参考文献

- 1) 「学士課程教育の構築に向けて」、中央教育審議会（答申）、平成20年、[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm).
- 2) 南 伸昌, 他, 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 第7号, pp. 105-112, 2020.
- 3) 絹川正吉「大学教員の意識改革と実践－FDの理論と実際－, 絹川他編『学士課程教育の改革』, 東信堂, 2004.
- 4) 「予測困難な時代において生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ(審議まとめ)」, 中央教育審議会大学分科会大学教育部会, 平成24年.

令和4年4月1日 受理



# Report of Mutual Class Observations among Teachers, carried out in the 3rd year of Reiwa

Kanako FUKUDA, Yuuno NATSUME, Yoshiyuki ONOSE and Nobumasa MINAMI